

## 講演録

## 『黄金期』の日中交流：20世紀初期の日本のアジア人留学生

本山美彦先生（京都大学名誉教授）

21世紀アジア学会大会 特別講演

平成26年1月30日

- I 辛亥革命（しんがいはくめい、1911－12年）
- II 四書五経
- III 日本への留学熱
- IV 呉清源
- V 幕末に日本人留学生と米国ラトガーズ大学
- VI 西周（にし・あまね）が普及させた学問用語

留学とは若い人が、ただ語学や専門知識を得るために異国に渡ることをいうものではありません。留学とは、母国と留学先の外国とのそれぞれの文化を交流させ、その中から、人としての共通の尊厳を生み出す役割を担うことなのです。

昔から、海外に留学するということは、すでに本国でひとかどの地位を築いた人が学問や知識を伝えるために異国の知識人と接し、自らも異国の知識を母国に持ち帰るという知識・学問の相互交流の媒介を目指したものでした。今日、私は、外国の知識人たちが、いかに相互に豊かな知識を伝えあったのかについて話します。古代中国、近代中国、幕末・明治の米国、オランダの順序で、留学という行動がどれほど素晴らしいものを互いに築き上げたかを見ていこうと思います。そして、日本人が、留学生たちとの交流を通じて、留学生に感謝し、留学生たちの母国に畏敬の念を持ち、その国を支えていたか、について皆様のご理解を深めることができれば幸いです。

## I 辛亥革命（しんがいはくめい、1911－12年）

皆様は「えと」（干支）という言葉をご存知ですね。今年は「きのえ・うま」（甲午）です。「えと」とは正式には「じっかん・じゅうにし」（十干十二支）といいます。辛亥革命が勃発した西暦1911年の「え」（干）は十干の「かのと」（辛）、「と」（支）は十二支の「い」（亥）です。ですから、1911年の事件は辛亥革命と命名されたのです。

辛亥革命を主導した孫文の理想は、「三民主義」です。「三民」とは、「民族」、「民権」、「民生」を指していることについては、皆様もよくご存知のことと思います。しかし、孫文のもう1つの思

想である「五族共和」については意外に知られていないのではないのでしょうか？ 五族共和とは、漢・満・蒙・回・チベットの5族による中華民国の建設というものです。この理念は、1911年10月10日の武昌で起きた兵士の反乱、1912年2月12日の宣統帝（溥儀）の退位などによって、アジア初の共和制（民国紀元）の成立とともに、封建的因習を打開したいというアジア人の心に灯をともしたのです。しかし、北洋軍閥の袁世凱（えん・せいがい）が新政府の支配権を握ったことによって革命の理念は撤回されてしまいました。

それにしても、ことアジアからの留学生に関しては、辛亥革命は大きな影響をアジアの学生に与えました。日本に在住していた留学生たちは、辛亥革命に強い共感を抱いたと思われます。1904年段階で清国から日本への留学生は合計で2万人を超えていました。彼らが中国の革命勢力への支持を表明していたのです。1905年に「中国同盟会」が東京で設立されました。会員の90%以上は日本に留学した中国人学生たちでした。それは当然なのでしょうが、その中には、辛亥革命の指導者の孫文をはじめ、黄興、王龍恵、宋教仁、胡漢民、廖仲愷（りょう・ちゅうがい）、朱執信、汪精衛などの精鋭がいました。

日本人の中にも中国同盟会を支援する人たちも増えていました。梅屋庄吉、北一輝などが孫文に対する有名な協力者でした。

1912年1月1日、孫文が南京で「中華民国成立宣言」を発しました。初代臨時大総統には孫文が就任しました。新政府の幹部の多くは、日本への留学経験者でした。陸軍部総長（参謀本部総長兼務）に黄興、外交部総長に王龍恵、総統府秘書長に胡漢民、法制局長に宋教仁と「中国同盟会」の会員たちが就任しました。

ここで、少し横道に逸れて、2月にTVで放映されたドラマについてお話ししましょう。それは、梅屋庄吉という人についてのドラマでした。後の日活となる日本活動写真株式会社を設立し、中国の革命家・孫文を支援した実業家・梅屋庄吉の生涯が初めてドラマ化されたのです。テレビ東京から放映されます。ドラマの題名は、「たった一度の約束 ～時代に封印された日本人～」というものです。2014年2月26日の21時00分に放映されます。柳葉（やなぎば）敏郎、夏川結衣（ゆい）のコンビにより激動の時代を生きた夫婦の絆を描いたものです。梅屋庄吉については、過去にNHKがドキュメンタリーにしたことはあるのですが、その人生がドラマ化されるのは初めてなのです。梅屋庄吉（1868～1934年）は長崎に生まれました。香港で孫文と出会って意気投合しました。そして、30年もの間、映画興行の成功により得た莫大な富を孫文に送り続けました。革命が成功した後も、孫文との関係は決して口外しないようにという遺言を残しています。庄吉の妻・トクは、香港に行った夫を日本で9年間も待ち続けるなど、バイタリティー溢れる風雲児の夫を支えました。夫の孫文への気持ちに共感し、会社が傾いても夫への愛に揺るぎはありませんでした。庄吉は「たった一度の約束」から、異国の革命を手助けしたのです。その理由は何だったのでしょうか？ ドラマは実際の資料や映像を交え、その謎に迫るというPRを出しています（『スポニチ』2014年1月19日付から転載）。

神戸には、孫文記念館があります。孫文（孫中山）を顕彰する日本で唯一の博物館として、神戸

潜伏中の彼をかくまった川崎重工業の松方幸次郎との縁もあり、1984年に開設されました。建物は、華僑の貿易商、呉錦堂（1855～1926年）の舞子海岸にあった別荘・「松海別荘」内に1915年に建てられた八角形の中国式楼閣「移情閣」を移設したものです。松海別荘は1913年に孫文一行が神戸を訪れた際の歓迎会の会場でありました。現在、館内の壁面は復元製作された金唐革紙（手製の高級壁紙）によって装飾されて、館内には孫文の著作や遺品などの貴重な資料が展示されています。自筆の石碑「天下為公」（てんかいこう）も残っています。この言葉は、世界のチャイナタウンの入り口に掲げられています。辛亥革命は、中国で2000年余も続いていた封建制を打破した民主革命でした。「天下を公と為す」と日本語では読み下し、「大道の行われるや、天下を公と為し、賢を選び能を与し……故に外戸をして閉じず、是を大同と謂う」『礼記』（らいき）の文をまとめたものです。「天下為公」を孫文はよく揮毫しました。有名なのは南京・中山陵正門の雄渾な筆遣いのものです。この原筆は台湾の故宮博物院に所蔵されていて、その博物院正面にも掲げられています（堀内正範『日本と中国』『四字熟語ものがたり』2011年10月15日号より）。「移情閣」という別称は、窓から六甲山地、瀬戸内海、淡路島、四国と「移り変わる風情」を楽しめることから名付けられたということです。また、楼閣の外観が六角形にも見えることから地元では「舞子の六角堂」と呼ばれています。

## Ⅱ 四書五経

「四書五経」（ししょごきょう）が、中国の永遠の基本的な教科書でした。「四書五経」とは、儒教の経書の中でとくに重要とされている「四書」と「五経」です。君子が国家や政治に対する志を述べることを「大説」といいます。それに対して、日常の出来事に関する意見・主張や噂話など虚構・空想の話を「小説」といいます。私たちがなにげなく話題にしている「小説」という言葉は、中国の古典からきているのです。

「四書」とは、『論語』、『大学』、『中庸』、『孟子』。「五経」とは、『易経』、『書経』、『詩経』、『礼記』（らいき）、『春秋』をいいます。「五経」の方が、「四書」よりも高い位置にあるようです。ちなみに、「経」とは、織物の縦糸のことであり、物事の[筋道]を指しています。

戦前の中国の知識人たちは、子供に5～6歳からこれら書物を暗記させていました。字を覚えさせるために使われたのが『千字文』（せんじもん）でした。4字を一句として、4字熟語にし、250句からなるものです。字はすべて異なっています。250句×4字＝1,000字です。「天地玄黄」（てんちげんこう＝天は黒く、地は黄色＝黒は奥深い意味）から始まり、「焉哉乎也」（えんさいこや＝これで終わりという意味）で終わります。現在の中国人も4字熟語を使いたがる傾向があります。昔は、このテキストを終日暗記するという勉強方法でした。

『千字文』は、日本にも王仁（わに、生没年不詳）によって伝えられたとされています。王仁は、記紀の記述によると、楽浪郡が高句麗によって滅ぼされた後、百済に逃げ、さらに百済から日本に渡来し、千字文と論語を伝えたとされています。『日本書紀』では王仁、『古事記』では和邇吉師（わにきし）と表記されています。その姓から見て、漢人系の人であっただろうとも言われています。

ます。王仁に関するもっとも詳細な記述は日本書紀のものであり、それによれば、百済からの使者・阿直岐（あちき）を介して、来朝したとされています。

「四書五経」なんて遠い時代のことで私たちには関係がないと思う方もいらっしゃるかも知れません。そういう方には、次の慣用句をお見せしましょう。

「窮すれば通ず」という言い回しがそれです。この意味はお分かりですか？ 窮するとは行き詰まることですね。通じるとは局面を打開して上手くいくことですよね。「行き詰まれば上手くいく」とはどういうことなのでしょう？ 表現になにか矛盾して違和感を抱かざるを得ませんね。じつは、この言葉は、「五経」の1つの『易経』にあるのです。正しくは、「窮すれば変じ、変じれば通ず」（易窮即変、変即通）なのです。つまり、イノベーションが大事という意味で、「世の中はいつも変化し続けるものであり、行き詰まれば、変化しなさい」ということなのです。これは、『易経』の「繫辞下伝」（けいじかでん）のものです。このように、私たちがよく口にする慣用句の多くは、「四書五経」からきているのです。私たちは、中国の古典から受けている恩恵を忘れてはなりません。

1905年に科举（科目別選挙）の制度が廃止されました。しかし、中国の知識人たちは、清朝から中華民国に時代が移っても古来の教育方法を採用していました。科举は7世紀から続く中国の官吏登用試験でした。試験内容には、「四書五経」のほか、「詩」、「賦」（ふ＝中国の韻文の文体の一種）、「論」（政策論）もありました。受験生は独房のような部屋に閉じ込められ、1か月の間、答案を書かされていました。合格率は信じられないほど低いものであったことは皆様ご承知だと思います。

### Ⅲ 日本への留学熱

日本にきて、無敵を誇った囲碁界の天才、呉清源の父（呉毅）も日本への留学経験があります。1900年前後から、中国人の日本への留学はブームの様相を見せ始めていました。

ただし、呉毅の足跡はよく分かっていません。それでも、囲碁に凝っていた呉清源の父・毅は囲碁に関する貴重な書物を日本から中国に持ち帰り、息子・清源の囲碁の独学に大きく寄与しています。

日本への留学ブームは、清朝政府が、若き俊才たちに先進的な学問を学ばせようと、日本を派遣先に選んだことも一因です。清朝は、近代化に踏み切った日本の状況を若者たちに知らせようとしたのでしょう。

日露戦争後、中国人の日本への留学熱がさらに高まりました。1906年には年間で1万人を超える留学生在が日本にやってきました。それは、科举が廃止されたのに、中国で高等教育機関がまだ十分に建設されていなかったことにもよります。それに、当時、日本へ留学するのに、パスポートがいなかったということも留学生在が多くなった理由の1つでしょう。中国の若者たちは、手近で先進知識を得られる日本を目指したのでしょう。

非常に多くの中国人留學生を受け入れるために、法政大学、早稲田大学、明治大学などが、「速

成科」と呼ばれる専門教育機関を設けました。法政大学では1904年から1908年の速成科入学者数が2,117人、卒業者が986人でありました。とくに東京の私学には留学生が殺到したのです。

当時の法政大学の学長は梅謙次郎という人でした。彼は、中国の法制度を近代化するために、積極的に中国からの留学生を受け入れることを方針としていました。

当時、東京在住の中国人留学生の多くが、神田駿河台にあった「清国留学生会館」を中心にした地域に住んでいたようです。1902年にできた「清国留学生会館」は、中国人の集会場所になっていました。この会館ができた年の4月に来日した魯迅は、この会館によく顔を出していました。しかし、ここで、魯迅は留学生たちから糾弾されるという辛い経験をして、仙台に行くことになりました。

魯迅は「藤野先生」でこの会館における同胞の騒々しさに嫌気がさしたことを述べています。

「中国留学生会館の門衛室ではちょっとした本が手に入ったので、ときどき顔を出してみるだけのことはあった。午前中なら、奥の洋間で休むこともできた。だが、夕方になると、あるひと間の床がきまってドスンドスンと鳴り出し、そのうえ部屋中にもうもうたる埃が立ちこめるのである。消息通に尋ねてみると、『なあに、ダンスの練習をやっているんですよ』とのことだった」。「よその土地へ行ってみたら、どうだろう」。

こうして魯迅は東京を離れ、仙台の医学専門学校への移動を決意したのです。これは、1904年、魯迅が24歳の時でした。そのきっかけとなったのが、東京で学生生活をおくる同胞の騒音だったということです。

ちなみに、ここに「藤野先生」というのは、藤野巖九郎（ふじの・げんくろう）のことです。藤野は、現在の福井県の芦原に住んでいた日本の医師であり教育者であり、仙台の医学専門学校（現在の東北大学医学部）の教授をしていた時に、この学校に入学した魯迅と良好な師弟関係を結び、魯迅が感謝して小説にしたことで著名になった人です。私も福井県立大に赴任している時、「藤野巖九郎記念館」を幾度か訪問しました。現在の中国浙江省紹興市の「魯迅記念館」には藤野巖九郎の胸像があります。

しかし、魯迅が東京を去った本当の理由は別のところにあったようです。後に革命家として名を馳せることになる同じく中国人留学生との悲しい衝突があったのです。それは、当時の文部省が打ち上げた中国人留学生に対する「取締規則」を巡るものでした。

1905年11月2日に、文部省は、清国留学生に対する取締規定、「清国人ヲ入学セシムル公私立学校ニ関スル規定」を出しました。その第十条に、他校で「性行不良」学生として一旦退学させられた者に対し入学許可を出すことを禁止する規定というものが盛り込まれていました。これに、清国留学生が反発したのです。「性行不良」には革命運動も含まれる可能性があるととして授業のボイコット運動（同盟休校）を留学生たちが起こしたのです。

1905年12月に入って議論が積み重ねられて、各学校から選出された留学生たちが、この留学生会館に集結して対策を協議しました。その中に、実践女学校の秋瑾（しゅう・きん）がいました。

当時の『東京朝日新聞』は、かなり批判的な論調で、清国留学生のことについての記事を執拗に



掲載していました。とくに、1905年12月7日の同紙の記事は次のようなものでした。＜同盟休校は、「東京市内各学校に在学する8,600余名」の清国人留学生によるものであった。「刻下の大問題」であるこの同盟休校は、「清国人の特有性なる放縱卑劣の意志」から起こったものである＞。これが火に油をそそいだのは当然でしょう。憤激のあまり、陳天華という学生が、遺書をしたためて、大森海岸に身を投げて憤死しました。

清国留学生会館で開かれた浙江同郷会の集会（毎週1回開催されていました）で、本国で後に革命家として処刑されることになる秋瑾は同盟休校をさらに突き進めて清国留学生の一斉退学を主張しました。彼女は、興奮いつも身に付けていた短刀を演台に突き刺し、一斉退学に反対する学生達に「死刑」を宣告しました。魯迅の弟である周作人はその様子を著書『魯迅の故家』で次の様に書いています。

「留学生はこぞって反対運動を起こし、秋瑾が先頭になって全員帰国を主張した。年輩の留学生は、取締りという言葉は決してそう悪い意味でないことを知っていたから、賛成しない人が多かったが、この人たちは留学生会館で秋瑾に死刑を宣告された。魯迅や許寿裳（きょ・じゅしょう）もその中に入っていた。魯迅は彼女がひと振りの短刀をテーブルの上になげつけて、威嚇したことも目撃している」。

ここで触れられている許寿裳は、魯迅と同郷の親友でした。著名な教育者・伝記文学作家で生涯を中華文化事業に尽くし、最後の3年は台湾文化の復活・再建に貢献しました。紹興では、蔡元培・魯迅・許寿裳を「越中三傑」と称されています。

全員総引揚げを主張した秋瑾は、1905年12月に帰国し、武装蜂起を企画したが失敗し、1907年7月15日に処刑されました。31歳でした。杭州西湖畔には秋瑾像が建てられています。

これで、日本に留学していた当時の清国留学生たちが、辛亥革命で高揚していたことがお分かりになったでしょう。次に、囲碁界の天才の呉清源について述べます。

#### Ⅳ 呉清源

広い意味での留学で輝かしい世界を切り開いた人に、昭和の囲碁界で最強と言われた天才棋士（きし）・呉清源（1914年生まれ）がいます。囲碁の神様とも言われている人です。呉清源を取り上げるのは、緊迫していた日中関係の中で、囲碁という高い哲学と文化を歴史的に持つ世界的な遺産を発展させるために、当時は本場中国を越える水準にあった日本の囲碁界に中国の天才を送り込んだこと、そのことで、多くの日中の関係者が、政治的な緊張関係を越えたところで動いたことを皆様に知っていただきたいからです。

呉清源は上の2人の兄たちとともに、4歳で家庭教師から「四書五経」を暗誦させられました。すでに述べましたが、中国の教育の初期段階は「四書五経」から入っていたのです。

まず、辛亥革命後の対立する2つのグループ（安徽派＝日本が支持、直隸派＝米国が支持）のうち、安徽派の段祺瑞から話を始めましょう。彼は、直隸派との抗争で浮沈を繰り返していました。彼は無類の囲碁好きでした。お抱え棋士を持ち、早朝の執務前に一局指すのが習慣でした。1919年

には日本の本因坊秀哉を北京に招待しています。

1925年、段祺瑞は、すでに強豪の棋士として名を馳せていた12歳の少年時代・呉清源と面会し、棋士としての才能を見抜き、月100元の生活費を呉に渡す約束をしました（中学教諭でも当時の月給は60元）。呉一家は当時、無収入でしたので、家族の生活はこの60元に依存せざるを得ませんでした。「清源」という号は段祺瑞のお抱え棋士から貰ったものです。呉清源の本名は「泉」です。段との対局で呉が勝つと、段祺瑞は呉とは二度と対局しなくなりました。そして、1926年に段祺瑞はまたも失脚します。収入源を断たれた呉一家は路頭に迷いました。収入を断たれた呉は、日本人の強豪たちと対局するようになります。その連戦連勝ぶりが日本でも評判になりました。

1926年8月、日本から岩本薫という大物の棋士が北京にきた時に、北京在住の囲碁の打ち手で呉清源の才能に惚れ込んでいた山崎有民という人が呉を岩本に引き合わせました。呉に3子を置いた岩本との対局では呉清源がまず勝ちました。2日後、2子を置いて再度対局し、今度は岩本が勝ちました。しかし、岩本は呉に感服しました。そのことが北京の新聞で大きく書かれました。呉清源の評判はますます高くなりました。

1927年11月23日、北京を訪問した日本棋院5段の井上孝平が呉清源と対局しました。1勝1敗でした。井上は呉の実力を認知しました。棋譜を山崎が日本の瀬越憲作（せごえ・けんさく）8段に送り、瀬越から幕末の天才棋士「秀策の再来」と激賞されました。日本への留学を目指して、呉は山崎の妻から日本語の特訓を受けました。

日本の瀬越も、囲碁仲間で超大物政治家の犬飼毅（いぬかい・つよし）に相談しました。犬飼も孫文を保護し、辛亥革命を支援していました。

犬飼から「もし、呉に日本の名人位を取られたらどうする？」と聞かれた瀬越は「囲碁界の発展のために本望」と応えています。

呉の生活費は大倉財閥の創始者・大倉喜八郎の長男で日本棋院副総裁・大倉喜七郎に頼むことになりました。大倉は快諾し、月200円を2年間に亘って支援すると約束しました。

犬飼は北京の在中国公使・吉沢謙吉に依頼、吉沢は北京政府の漢学者・楊子安（よう・しあん）に後見人になってもらうことを依頼、自分（7段）より上の本因坊秀哉（9段）がいたために山崎の進言を断り続けていた瀬越も呉の師匠になることを受諾しました。そして、1928年10月、14歳の呉清源が来日します。中国では食べていけない家族も一緒に来日しました。そして、呉清源は天才の名を前評判通り発揮します。

ただし、日中関係が日々悪化している状況下で呉一家はけっして幸せな状態ではありませんでした。日本人からの数々の迫害に遭ったようです。

1934年5月、20歳になった呉清源は日中両国に日本への帰化申請をしました。敵の国に帰化するのかと苦しんだ兄の呉炎は中国に去りました。炎も、母国で大学教授にはなりましたが、親日的であるとの理由で同じく迫害に遭ったようです。呉清源も日本国籍を申請する過程で中国籍を抜くことの困難さに直面しました。

終戦直後、呉清源は日本国籍を剥奪されて、1949年まで無国籍状態に置かれました。苦しかった

のでしょう。1947年、栄光の後、極度の苦しみにのたうっていた大横綱の双葉山と呉清源は新興宗教で意気投合し、反権力的な心情を持つようになりました。

蒋介石が台湾を拠点として中華民国を継続した時、1949年に呉清源は中華民国籍をやっと取得しました。ただし、台湾には行かずに日本に留まり、「日本棋院」で活躍を継続しました。1952年6月、本因坊・橋本宇太郎、9段の藤沢庫之助を破り、日本で最強の棋士になりました。その後、台湾の「囲棋協会」から「棋聖」という称号を贈られたが呉は断っています。「聖」とは孔子のみに使われるべきである」というのが呉清源の理由でした。そこで、台湾側は「大国手」（大名人）に変更し、それは呉も受諾しました。1979年、呉は日本に再帰化しています。国家間の争いに家族の人生が振り回され、中国、台湾、日本とばらばらになって生活することを余儀なくされた呉清源の兄弟たちの苛酷な軌跡を描いた労作があります。桐山桂一『呉清源とその兄弟—呉家の百年』岩波現代文庫（2009年）がそれです。私は強く推奨します。

## V 幕末に日本人留学生と米国ラトガーズ大学

私の研究分野の1つにESOP（エソップ）というのがあります。企業の命運に責任を持たない機関投資家に企業の株式が大量に保有されることによって、現在の企業経営に様々な障害が出てしまっているの、それを是正するために、従業員をはじめ企業の大切な利害関係者（ステークホルダー）たちに企業の株を持ってもらう制度を促進させようとするのがESOPで、「従業員持株所有年金計画」です。この分野で研究を主導しているのがラトガーズ大学です。じつは、この大学が近代化に体制転換を目指す幕末や明治の若者たちを留学生として受け入れ、真摯に教育してくれたばかりか、いわゆる「お雇い外国人」として当時の米国の知識人たちを数多く日本に送り出してくれたのです。私が赴任したことのある越前（福井県）にはこの大学からウィリアム・グリフィスが派遣され、越前のみならず、日本に大きな足跡を残しました。グリフィスを調べているうちに、日本の近代化を担った若者たちがこの大学で薫陶を受けていたことを知り感激したことが、私の福井体験の最大のものです（<http://d.hatenane.jp/appletrees/20070528>）。

米国のニュージャージー州、ニューブランズウィックという町は、世界的大企業のジョンソン＆ジョンソンが1886年に創業したことで有名な古い町です。ちなみにこの会社は私が求めるESOPを他の企業に先んじて採用しました。この町にラトガーズ大学というニュージャージー州立大学があるのです。ラトガーズ大学は、米国がイギリスに独立を宣言する10年前の1766年に創立された、米国で8番目に古い歴史のある大学です。

大学のキャンパス近くの、ウィローグローブという古い墓地の中に、ひっそりと、日本人学生の墓があります。ここには7人の日本人学生と1人の幼女が埋葬されています。彼らは、1870年から1886年の19年間に亡くなっています。

欧米社会の実情を知れば知るほど、選り抜きの人材を長期的な視点で欧米に留学させようという機運が幕府や諸藩に高まりました。幕府は肥後藩よりも早い時期に軍艦建造発注の任務と併せて留学生を米国に派遣しようと計画しましたが、ちょうど南北戦争（1861－1865年）が勃発し、米国か



ら受入れを謝絶されました。やむなく幕府は、1862年、オランダに、榎本武揚（当時26歳）や西周（当時33歳）など15名の武士や職人を派遣しました。彼らはライデン大学などで学び、5年後に建造なった軍艦に乗って西洋の知識と文物を持って日本に戻りました。

長州藩も、1863年、伊藤博文（当時22歳）や井上馨（当時27歳）など5名を、（公式には日本人の海外渡航は禁止されていたために密かに）英国のロンドン大学に派遣しました。

薩摩藩も、1865年、森有礼（当時18歳）や五代友厚（当時29歳）など19名を同じく密かにロンドンに派遣しました。薩長が親密になった1つの要因にロンドン留学組の存在があると思われます。心細い異国の地で同胞に会えば、藩としての利害のずれなど小さく見えたことでしょう。

これらの留学には巨額の公費が使われました。しかし、安中藩の新島襄（当時21歳）の場合、1864年、全く単身で頼る先もないまま密航し、船長の給仕として働きながら米国に渡りました。ボストン到着後、事情を知った船の持ち主が新島の熱意に絆（ほだ）されて、新島を全面的に支援しました。新島はアマースト大学で学ぶことができました。

肥後藩の横井左平太・大平の兄弟が、南北戦争が終わった1866年、多くの人の支援を受けて米国のラトガース大学に向かいました。当時左平太は21歳、大平は16歳でした。2人を支援したのは、横井小楠、徳富蘇峰・蘆花の父、後で説明しますフルベッキなどでした。徳富兄弟の父は持ち山を売って資金援助をしようとした（しかし、どうしたことかこの巨額の金額が2人の留学前には消えていました）。

幕末期、欧米列強に迫られ開国した日本は、自らも近代化に向けてひたすら突き進むしかないことを悟ります。そして明治の初期にかけて、激動する時代の中で大勢の若い日本人が、藩や政府からの使命を帯びて、あるいは自らの情熱に駆られて、欧米諸国に渡りその文化を学びとろうとしていたのです。

ラトガース大学に留学した日本人の著名人を拾って見ましょう。横井左平太（横井小楠の甥）、横井大平（左平太の弟）、日下部（くさかべ）太郎（越前藩が派遣、卒業直前に病死、その縁でグリフィスが越前に赴任）、勝小鹿（勝海舟の実子）、富田鉄之助（仙台出身で勝小鹿に同行。後、日銀総裁、東京府知事）、岩倉具定（岩倉具視の実子）、岩倉具経（具定の弟）、服部一三（長州出身、岩倉兄弟に同行。後、岩手、広島、長崎、兵庫県知事）、畠山義成（杉浦弘蔵）（薩摩出身、後、東京開成学校（現東京大学）初代校長）、松村淳蔵（市来勘十郎）（薩摩出身、後、海軍兵学校長、海軍中將）、白峯駿馬（長岡出身、元海援隊。後、白峯造船所を設立）、菅野覚兵衛（安芸出身、元海援隊。後、海軍、その後郡山に入植）、工藤精一（東京出身、後、札幌農学校教授）、松平忠礼（上田出身、最後の上田藩主。後、子爵）、松平忠厚（忠礼の弟）。

等々です。息を飲むものすごい人物たちでしょう。ラトガース大学が多くのお雇い外国人を日本に派遣し、それを上記の華麗な人脈が支えていたことの近代日本に与えた影響力の大きさについては想像に余るものがあります。

在学中に逝去した日下部太郎について重要なことを追加してお話します。

日下部太郎は1845年福井藩士の長男として生まれました。幼名は八木八十八（やぎ・やそはち）

でした。幼少の頃から漢文に親しみ、1865年、20歳の八十八は藩命により長崎の幕府直轄の語学所、済美館で学びました。この時の英語教師が宣教師フルベッキでした。

1866年4月、幕府は長年の禁を改め、学問や商業目的の海外渡航を解禁しました。幕末の四賢候の一人、英明さを謳われた越前藩主・松平春嶽はすぐさま八十八を福井藩初の海外留学生として渡米させることを決めます。八十八は橋本左内の師として知られる藩の儒学者・吉田東篁（とうこう）の勧めにより、日下部太郎と改名しました。

1867年2月、日下部は長崎を出発しました。喜望峰周りで米国東海岸に行き、出発から5か月後の7月、ラトガース大学に到着しました。現地にはすでに、横井左平太と大平の兄弟がいました。彼らは、幕府が解禁するのを待たずに密出国し、米国に渡っていたのです。太郎はまず、ラトガース大学付属のグラマースクール（大学の前段階の学校）で基礎教育を受けることになり、大学の学生だったウィリアム・グリフィスから英語やラテン語を習いました。しかし、不幸なことに、大学の最終学年（3年生）の年に太郎は肺結核に倒れ、卒業を目前に控えた1870年4月13日、26年の短い生涯を閉じました。太郎の葬儀は翌日大学近くの改革派第二教会でとり行われましたが、ラトガース大学は彼の死を惜しみ、葬儀の間はすべての授業を中断して深い哀悼の意を表したそうです。太郎の葬儀ではグリフィスが葬儀委員長を、留学生仲間の杉浦弘蔵（先で説明したように、後の東京開成学校＝現東京大学の初代校長）が日本人代表を勤めたそうです。

幕末から明治にかけて、ニュージャージー州のラトガース大学は何百という数の日本人留学生を受け入れ、また日本に教師を派遣し、日本の近代化に大きな貢献をしました。なぜこの大学がそのような役割を担うことになったのでしょうか？ ラトガースとはどういう大学だったのでしょうか？

米国の大学の歴史は移民の歴史とともに始まります。米国では、コロニーが増え、それとともに牧師の不足が深刻化しました。牧師になるためにはヨーロッパの限られた神学校で教育を受け資格を得なければなりませんでした。コロニーの人々は米国にも牧師を養成し資格を認定できる学校を作ろうと努力しましたが、ヨーロッパの方がそれを許そうとしませんでした。それでも、17世紀から1776年の独立宣言までに、9つの学校が東海岸に設立されました。設立されたのは、現在の大学名でいうと、ハーバード大学、ウィリアム・アンド・マリー大学、イエール大学、ペンシルバニア大学、プリンストン大学、コロンビア大学、ブラウン大学、ラトガース大学、そしてダートマス大学です。

いずれも篤志家たちの寄付金に基づく私立の学校です。そして設立の経緯からも、キリスト教の各会派と深く結びついていました。ハーバード、イエール、ダートマスはピューリタン（会衆派教会）、ウィリアム・アンド・マリー、ペンシルバニア、コロンビアは英国国教会、プリンストンはプレスビテリアン（長老派教会）、ブラウンはバプテスト、そしてラトガースはオランダ改革派教会と結びついていました。

ラトガース大学の最初の名称は、クィーンズ・カレッジで、2度倒産の経験をしたのですが、オランダ改革派教会の信者で、独立戦争の英雄で篤志家としても知られたヘンリー・ラトガースの惜

しみない寄付により、1825年に学校は再開しました。この時、クイーンズ・カレッジはその恩に深く感謝してラトガース大学と名前を変えたのです。日本へのお雇い外国人がオランダ改革派協会から派遣されてきたのは、彼らを斡旋したのがラトガース大学であったからです。

フルベッキのことについても重要な人物なので少し触れておきたいと思います。

欧米の文化を吸収したいと熱望する幕末の若者たちに、米国のラトガース大学に留学する道筋をつけてやったのは、長崎の宣教師グイド・フルベッキでした。

グイド・H・F・フルベッキは、1830年オランダのザイストに生まれました。父方の家系はモラヴィア（現在のチェコの東半分）、母方の家系はイタリアで、それぞれ戦争や宗教改革の余波を受けて安住の地を求めてオランダに移ってきたのです。

1852年、22歳のフルベッキは米国で牧師をしていた義理の兄の勧めで米国ウィスコンシン州グリーンベイ、そして、南部アーカンソー州ヘレナに移り、橋の設計などに携わりました。その地でフルベッキは、日曜日さえ綿花畑で働かされる黒人奴隷たちの姿を見、深く心を痛めました。そして、1855年、25歳のフルベッキは、ニューヨーク州オーバーンのプレスビテリアン（長老派）の神学校に入ります。ここで、フルベッキは、サミュエル・R・ブラウンを知りました。ブラウンは、オランダ改革派教会の牧師で、中国で9年間宣教師をしていた経験があり、再びアジアに伝道に行きたいと考えていました。

フルベッキは20歳年長のブラウンが語るアジアの様子に興味深く耳を傾けたことでしょう。やがて彼らは同じ船で日本に渡るという運命をたどります。

その頃米国のオランダ改革派教会では、積極的に宣教師をアフリカやアジアに送りこんでいました。宣教師委員会の責任者は、日本で「フェリス女学校」を創設した J・M・フェリスでした。フェリスは、日本に宣教師を派遣すべく、オランダに対しては日本の警戒心が低いことを考慮し、オランダ語に堪能なオランダ系の宣教師が最適であると考えました。

このことが、フルベッキの耳に入りました。1855年から神学校にいたフルベッキは、そろそろ修了後のことを真剣に考えていた時期でした。フルベッキはこれが自分の天命であると受け止め、サミュエル・R・ブラウンとともに応募することを決意しました。そしてニューヨークの改革派教会でフェリスらの面接を受け、オーバーンで牧師としての叙任を受け、その翌日には改革派教会に所属することになります。

フルベッキは4月にオーバーンを出発し、大西洋を横切り希望峰を回り、上海を目指しました。一行にはフルベッキとブラウンの他に、医師でもあるデュアン・B・シモンズがいました。フルベッキは神奈川に行くブラウンやシモンズと上海で別れ、11月に長崎に到着します。ニューヨークを出てから187日目のことでした。こうしてフルベッキは、1859年の暮れから長崎での活動を始めたのです。

一方1856年には、初代駐日総領事としてタウンゼント・ハリスが下田に赴任します。ハリスは1858年成功裏に日米修好通商条約を締結させ、1859年初代駐日公使となります。1861年リンカーン大統領が二代目の駐日公使として任命したのがロバート・H・プリュイン（Pruyn:ブラインとも表

記)でした。このプリュインはニューヨーク州のオランダ系の名家の出身で、オランダ改革派教会の信者でラトガース大学の理事を務め、また彼自身ラトガース大学の卒業生でもありました。プリュインは1865年まで江戸の麻布に置かれた米国公使館で駐日公使を務めました。フルベッキの地道で困難な活動を物心両面から支えたのはニューヨークの改革派協会でした。フルベッキはその活動を定期的にニューヨークのフェリスに報告します。やがてフルベッキのもとに日本中から欧米の知識を吸収しようと熱望する若者が大勢集まるようになった時、フルベッキは彼らの留学先として改革派協会の学校であるラトガース大学のことを真っ先に考えたはずです。その頃、プリュインは任期を終えてニューヨークに戻り、政財界の有力者として活躍していました。フルベッキがフェリスやプリュインの支援の下にラトガース大学に日本人留学生を送り込むようになるのは、もはや必然の流れでした。ラトガースの留学生とフルベッキに関することの多くは、<http://d.hatena.ne.jp/appletrees/>に依拠させていただきました。

最後に、オランダ留学の成果を遺憾なく発揮してくれた西周（にし・あまね）のことを説明して、今日の私の話を終えさせていただきます。

## Ⅵ 西周（にし・あまね）が普及させた学問用語

次に、先ほど、米国への留学生を説明した時に、少し出てきた西周についてお話しします。西周は、日本の近代化に大きな功績を残した人で、あの文豪・森鴎外の親戚でもありました。森（1862年生まれ）よりも西（1829年生まれ）の方が年上です。家系図用語でいえば、西の祖父が森の「曾（そう）祖父」（祖父の父）、つまり「ひいじいさん」ですので、森は西の従甥（じゅうせい）、つまり、「いとこの息子」に当たります。

英語の「フィロソフィー」（philosophy）に「哲学」という訳語を当てたのは西周であると言われています。西周は、英語からじつに多くの日本語訳を日本社会に定着させた人です。以下、列举して見ます。「学術」「地理学」「音声学」「数学」「天文学」「哲学」「生理学」「法学」「物理学」「幾何学」「動物学」「技術」「定義」「真理」「帰納」「演繹」「命題」「感性」「外延」「内包」「定言」「意識」「感覚」「理性」「観念」「実体」「悟性」「主観」「客観」「分数」「積分」「微分」「子音」「母音」「博物館」「社会」「印刷」等々。

西は、オランダに留学する（1862年9月）直前に書いた『西洋哲学史の講案断片』の中で、‘philosophy’を「ヒロソヒ」とカタカナで表記し、その用語がソクラテスによって用いられたことを記し、それは「知恵を愛する人」という意味であると解説をしています。

西は、オランダのライデン大学で指導して貰う予定のシモン・フィッセリング教授に宛てた手紙の中で、あらゆる学問を学びたいと訴え、あらゆる学問の中に「哲学」を含めていました。そして、帰国後に発表した『百一新論』（1866-67年執筆、1874年に、NHK大河ドラマで出てきた、あの八重の兄の山本覚馬・蔵版として京都で出版）の中で、天道、人道を解明する学問が‘philosophy’であり、その用語を「哲学」と訳すと書いています。以来、「哲学」という用語は、中国でも使用されるようになりました。

西は、ライデン大学への留学動機をこの手紙で書いています。(ライデン大学には、日本に)「必要な、また我が国で知られていない統計学、法学、経済学、政治学等の有用な学科が沢山ございます。……更に哲学と呼ばれる学問の領域をも訪れなければなりません」とし、哲学者として、デカルト、カント、ヘーゲルの名を挙げています。

西周がオランダに留学しなければ、今日の日本の人文・社会学はもっと遅れていたでしょう。西が学問に与えた貢献はとてつもなく大きいのです。

私の話を聞いて下さっている留学生の皆様、また、これから海外に留学したいと希望されている日本在住の皆様、幕末・明治で米国、オランダで活躍した日本の留学生たちに思いを馳せて、苦難に満ちた21世紀の世界に生きる希望を与えるような人物になって下さい。

ご静聴ありがとうございました。